國學院大學学術情報リポジトリ

How Does Extend Meaning of A Word? : Especially on 歟(yu) in 段注Duanzhu

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大橋, 由美
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000848

字義の広がりについて

―「歟」字の段注からみる―

大　橋　由　美

キーワード

『説文解字』(説文と略す)　『説文解字注』(段注と略す)　六書　轉注　假借

はじめに

形・音・義を漢字の三属性という。つまり一字＝一音節＝一語、まとまりのある音の最小の単位が、ひとつの意味（表したい気持ち・ココロ）を表わすことばで、それゆえ一モジ（漢字）で表記されるという具体的関係にある原則をいい、中国語が極めて特徴的であることを表わすといえよう。

そもそも、この原則は実際には、後漢 許慎が著わした現存最古の字書である『説文解字』（以下説文と略す）で説かれた六書説（漢字の構造と用法についての総合的概念）として体系化され、その注釈書として高く評価され続ける清代の段玉説の著『説文解字注』（以下段注と略す）によってその概念は詳細に解明され、文字のなり立ちとでき上がったその文字の用法とに分けられるとし、段注は独得の成果を上げた。

六書説からすれば、基本であるモジ自体の構造ではなく出来上がったモジを如何に使うかという用法が、応用で例外に関わるだろう。

さて、漢和辞典などには見出しの親字である一つの漢字に意味が説かれるが、必ずしも一つだけとは限らず、寧ろ複数の意味が続けて列ね説かれている。訳語の問題（執筆者の方針）もあろうが、出典・典拠を明示して近似の意味だけでなく、遠い、寧ろ相反すると思われる意味も記されれば、利用者には原則に対し例外的とさえ思える。原則と例外的なこととの暗黙のともいうほどのこの緊密さが、辞書を活用する者たち、特に日本人などには混乱を覚えさせるかもしれない。

そこで、本小考では、段注の六書説を主軸に、例外的と思える意味の広がりや遠さについて、六書説からみて原則の意味が如何に発展してゆくかについて考えることにする。例

として、八篇欠部の歟を主とし、意味上関連するモジ（単字で表されることば、以下参照）のいくつかを取り上げる。

1　歟とその類（なかま）

段氏は説文の十五篇の敍に注して六書説を説く。原則は、本体としての造字法四つで創られたモジ（文二つと字二つ）：指事・象形（以上文）・形声・会意（以上字）、応用として創られたモジの用法が二つ：轉注（互訓で異字同義）・假借（当て字で同字異義）である。これを踏まえ、八篇欠部の歟と十篇馬部の驟につき段注を記し、段氏轉注説の異字同義の実際、つまり同義とは何か、その同義であることをどう異字から導くか、さらにはその導き方の根本に多く関わる假借説ついて一瞥する。[1]

なお、六書説は、敍では原則がその典型例を挙げて説かれる。例外があっても、それは原則が明らかであって初めて対比的（相対的）に炙りだされるものであろうから、一いち備に予め説明したり言及されることはない。段氏の執筆における基本的姿勢でもある。従って、読者は、原則を知り、個別の文字の条で、原則通りか外れるかを具体的に理解することになる。この執筆態度から、あるモジ（ことば）についての説は、関連する文字の知識が助けとなってさらに深く理解でき、そのことば全体がもつ意味世界を理解できることになる。関連するモジの段説もまた同時に欠かせないのである。

凡例は以下のようである。

・8下19b　歟（ ）：八篇の下、十九葉のウラ、見出し親字の小篆 （歟はその楷書）。
・㊀・㊁…：所謂説解（六書による親字の解説、段注による句読に従う）。
・その下の㊀・㊁…：各説解に付けられた段注。

1―1．8下19b　歟（ ）[2]

㊀安らかな气である。㊁欠に从（したが）い（欠を構成成分としてもち）、與（ヨ）がその聲（発音）。

㊀如えば（2上34a）趨は「安行（やすらかにゆく）」[3]と爲（な）し、（10上12a）驚は「馬行疾而徐（馬がゆくのは疾（はや）くて徐（ゆっくり）だ）」[4]と爲（す）るようなことは、音が同じで義が相（たが）いに近いからである[5]。今は（歟は）用いて語末の辭と爲すが、亦たおなじく安舒（やすくゆるやか）の意を取る。通じて與に作る。（その例は）『論語』（鄉黨篇　君在跛蹐如也）「與與如也」である。[6]

㊁以諸切（ヨと発音）。五部（私の古音説では五部である）。

筆者案

許慎が説解で本義は「やすらかな気」と説く。これを受け、この場合には部首が欠（人が息を出す）ゆえ「气（息がのびでる）」に特化はするものの、「安」が主たる基本的な意味であることを、段氏は説解に付した注として自説を説いてゆく。

この字の本義を更に詳説するのに有効として用いられた説文収載の他のモジは、趨（走部ゆえそもそもは人の行動）と鷺（馬部）で、それぞれ部首に関して「ゆく（走ると歩くとをかねる）動作」と「馬がゆく」で基本動作は同じだが、鷺には「それがはやいがゆっくりである」という説明が更につく。この補足説明はややずれた、あるいは矛盾する表現に思われるが、この相反する状態が同時にあることこそが、「安」の意に同じ（類似）となると敢えて説くようだ。そして、根拠をこの形声字が與を聲符とするからであるとして、一気に自らの古音説に従い論じ進める。

３字に共通する與聲に「安」の共通のニュアンスがあることをより具体的に説くために、『論語』（郷黨）に與聲（重言）でこの意と解される「君在踧踖如也　與與如也」を用いる。注（馬融）にいう「威儀中適之貌（厳正で礼式にかない両端にはしらないようす）」が、「安」へと導き進んで至り着く。つまり、「安」とは、「かたよらないさま」である、と段氏は考えている。単に間をとるというようなことではなく、「中適（相応しい程度に命中する、ずばり適切な程度）」というのである。段氏は、馬融の説に同じく、この程度こそが「安」であると解すると言えるだろう。

宋代の徐鉉も「氣緩而安也。俗以爲語末之辭（気が緩やかで安らかである。俗にこれをばもって語末の辞と為る）」と説き、段氏に学んだ王引之も『玉篇』が助辞で與に同じ（『經傳通釋詞四』）とするが、段氏も語末の助詞として用いるという。一般に疑問・推量・不定・感嘆などの気分を表わし、既に本義では使われることが少ないのであろうから、字書を著わすものは欠かさない注でもある。(7)

また、やはりこの「発音」自体が、おなじく安舒（やすくゆるやか）の意であることに由来する、とこの字の用法を補足するのは、「安」と「與」と音韻的な視点が重要となることをいう。一般に、中国語の特徴として、同じ諧聲符は同じ（近似）の意味を持つことは多い。與聲をもち「安」に関する文字は「安」が説解にある歟・趨２字と「疾而徐」がある鷺１字のこの3字である（江沅『説文解字音韻表　五』）。（後詳述）

１―２．10上13a驟（ ）(8)

1-1.　歟の段注は説論の根拠として引かないが、上記の「安」が大きく「疾而徐」へと意味が伸長することについては驟の段注が関わる。

㊀馬が疾く歩(ゆ)く。㊁馬に从い聚がその聲(発音)。

㊀（2上41a）歩の下（の説解）で「行也（ゆく）」[9]といい、（2上31a）走の下で「趨也（はしる）」[10]といい、（2下18a）行の下で「人之歩趨也（人があるくこととはしることである）」[11]という。然(そう)であれば則(つま)り行が歩と趨とを兼ねて言う。（しかし）此(ここ)は馬が行くで、馬が歩く、馬が走るの別(ちがい)である。

（『詩經』）小雅（四牡・五章）に「載驟駸駸（（四頭立ての馬車に乗り）ひた走って馳せ止まない）」とある[12]。

按(かんが)えるに、今では驟字は暴疾のいみをあらわす詞(ことば)（助詞）だが、古くはといえばつまり屢(ル)然のいみをあらわす詞（助詞）と爲(さ)れた。

凡そ『左傳』（文公14年・宣公2年・哀公14年）、『國語』（晋語）が驟と言うことについては、皆(すべて)屢と同義である。例えば（宣公2年）「宣子驟諫」、（文公14年）「公子商人驟施於國」[13]というようなのが是れである。『左傳』では驟といい、『詩』（正月）・『書』（益稷）では屢といい、『論語』（公冶長）では屢と言い[14]、亦た同時に亟（13下15a）と言うが、其の意(ココロ)は一(おなじ)である。[15]

亟の本義は敏疾であるが、去吏切（キ）に讀んで、數數然（頻繁に）のいみと爲す（助詞）。數數然はほかでもなく卽り是に敏疾だ。驟の用法は此れに同じになるのだ。數の本義は計（かぞえる）であるが、所角切（サク）に讀んで、數數然(サクサク)のいみと爲す（助詞）。そうして乃(つま)りはさらに又た引伸して凡そ迫促(ハクソク)（せまる・ちかい）の意と爲す。

（以上から）學を好む者は必らず心して（ことば・文字によって表わされる表現者の）其の意(ココロ)を知るべきことが、此(ここ)（この驟の条）に於いては見ることができる（ここでわかる）。馳驟（はせる意での）字としては（『禮記』）「曲禮」（車驅而騶、王於大門）で騶（10上16b）[16]を叚りてこれと爲す。

㊁鉏又切（ソウと発音）。（反切下字又は古音は1部だが）古音は四部に在る。徐仙民は『毛詩音』（『顔氏家訓　音辭篇』）では在遘（ソウ）の反し（発音）と爲すが[17]、古音である。

筆者案

1-1歟に同じく「ゆく」に関するここでは「疾」だけが説解にある。「はやさ」をいう場合、多分、人よりそれが際立ち判り易いモノ、例えば現代の車のような乗りものであれば、動物（例えば馬）にその特徴を求めたとは想像される。しかし、歩（ゆっくりゆく）があるのみなのに、段注は「ゆくはやさ」の違いであることに言い及ぶことは独得かもしれない。歟での融通無碍のような通じ方へと直に導くのとは異なるのは、ハヤイを話題にする必要があったのかと思われる。

以下、まず正統派の経書である『詩經』を典拠として論を展開するが、今用いられる助詞（語詞）の用法から分かり易く注意を喚起する。助詞は、実詞と異なり表現したい意（ココロ）をあらわすとき、それを使うのである。全て助詞としての用法から様々なハヤイ論を展開してゆく。引く典拠は全て経書であり、古い用例がみえることから、今の用法は古くからの実は雅な表現であることも知れる。

この条の段氏の論の展開をまとめる（Aは『詩經』の例から、Bは亟（キョク）を受ける）。

A　暴疾（ボウシツ）（はやい）→屢（ル）（しばしば）→亟（キョク）（敏疾・はやい）

B　亟（キョク）（＝敏疾）＝數數然（サクサク）（頻繁に＝敏疾）＝驟（ソウ）→→迫促（ハクソク）

ハヤイは驟、敏疾、つまり疾（シツ）を蝶番にしたように展開する。これが驟の説解で「疾」にこだわる理由で、段氏のハヤイの諸相を端的に表わす一般的なことばだろう。亟（キョク）がAからBを導きとりもつモジとなり、驟（ソウ）は引伸して迫促（ハクソク）となることから、動作をする時間的な間隔が短いことをいう。

１－３．10下34a懇

1-1.・1-2. より「疾」（或いは「徐而疾」）が意味の広がりにつながる。また「安」の與を諧聲符とするモジも関係する。1-1より與聲をもち「安」に関する文字は「安」が説解にある歟・趣２字と「疾而徐」がある鸒１字のこの3字だ。ここでは、1-1に引かれないが同様の意味の伸長が述べられた懇を見る（江沅『説文解字音韻表　五』参照）。

10下34a懇（ ）[18]

㈠趣歩懇懇である。㈡心を構成成分としてもち與（ヨ）がその聲（発音）。

㈠趣は「疾走也（疾く走る）」である。「趣歩懇懇（疾く走り歩くそのさまは恭敬なようすである）」は、疾而舒であることを謂う（意味する）のである。馬部（10上12a）鸒の下（説解）に「馬行徐而疾」といい、義が正に相（たが）いに（なかまとして）類（に）る。『漢書』（巻一百下·敘傳第七十下·述蕭望之傳第四十八）では「長倩愧愧」で蘇林は（注して）「愧愧、行歩安舒也（愧愧は行いや歩みが安舒なさまである）」という[19]。『論語』（鄉黨第十）では「與與如也」で馬（融）は注して「與與、威儀中適之皃（與與は威儀が中適する皃（さま））」という。（この）與與が卽り（他でもない）懇懇の假借だ。（また）欠部で歟は「安气也」という。

㈡余呂切（ヨと発音）。五部。『廣韵』ではさらに又た平聲（上平九語）。

筆者按

ここでは、趣は「疾走也」であるが、この懇自体が重言した例を伴い「趣歩懇懇（疾く走り歩くそのさまは恭敬なようすである）」が、疾而舒であるという論の展開である。この導き方によって、馬部（10上12a）鬻の下（説解）に「馬行徐而疾」に関連付けられ、「義が正に相(たが)いになかまとして類（に）る」ので、疾而舒、つまり徐而疾となり、「中適」の仲間となり得るだろう。

なお、欠・馬・走、疾に関するモジは造字されても、安を意味するモジは造字し難い印象は、もとよりあるであろう。六書においては造字法より用法によって、この義のモジはあることになるのではないか。

２．安

さて、本小考で疾而舒、或いは徐而疾であれ「中適」となったのは、段説で歟が「安気」であるその「安」に焦点を当て安舒と発展したためであろう。以下に「安」に関わるモジを検討する。

２－１．７下9a安（ ）[20]

安については、大徐本（宋代徐鉉ら勅撰の説文）は、説解は「安静也。从女在宀下（安静である。女とその下に女がいる宀(やね)とを構成成分としてもつ、つまり会意）」とする。これに対し、段氏は説解を「竫也。从女在宀中。」と改めて説き進める。

㊀竫(やすらか)（亭安(安定)）である。㊁女とその中に女がいる宀(やね)とを構成成分としてもつ。

㊀竫は各本(テクスト)は靜(ママ)（安静？）に作るが、今正す。立部（10下20a）に竫とは「亭安也（安定(やすらか)なようす）」[21]というので、此こと轉注（互訓）と爲す。青部（5下1b）で靜とは「審也」というが、其の義(いみ)ではない。『方言（輶軒使者絶代語釋別國方言）』に「安、靜也」という[22]。許書（説文）をば以ってこのことを（一定の基準で）律(ただ)せば、靜(セイ)を叚りて竫(セイ)と爲ただけだ。安は亦た同時に語詞と爲て用いる[23]。

㊁此は（7下8b）寍と同じ意24。烏寒切（アンと発音）。十四部。

筆者按

安の段注は、論拠とするモジに静（竫の假借と説く）に関するものが引かれ、安定（とどまる・じっとする）とのみである。上記１の例のような動的な解釈は付されない。

２－２.５下１ｂ静（靜）[25]

静は竫の假借（当て字）と説くが、静の段注で詳しく説くので、以下に静を見る。
㊀寀らかにするである。㊁青を構成成分としてもち、爭（ソウ）がその聲。

㊀（司馬相如）「上林賦」（『文選』所収）の「靚槢」に、張揖（李善が引く郭璞の誤り）は注して「謂粉白黛黑也（おしろいの粉が白く黛は黒いことをいう（意味である））」という[26]。

按えるに靚（セイ）とは、靜（セイ）字の假借だ。（よそおいの）采色（いろどり）（五色を取り混ぜた美しいいろどり）が詳寀（くわしくあきらか）であるが其の宜（ほどよさ）を得ているさまが靜と謂う（意味である）。（『周禮』）「考工記・畫繢」に「畫繢之事（、雜五色）（模様を色ぬりして描くことは、五色を雜ぜる）」[27]と言うのが是れである。五色を分けて佈（あまね）くし、疏密に章（美しいいろどり）があれば、そのときは則り絢爛（まばゆいばかりにきらびやかで美しい）の極みであるとはいっても、しかしながら渫泥（にごり）が無く鮮やかでない。是れが靜という。人心が度（ほど）を寀らかにして宜を得、一言一事に必ず理義の必然を求めるならば、そのときは則り緐（おお）いなる勞わしさの極みであるとはいっても、しかし紛亂（まぎれ）ることはない。これも同じく亦た靜という。引伸して假借の義である。安靜（の意味の）本来の字は、當然立部に从う竫であるべきだ。

㊁疾郢切（テイと発音）。十一部。

筆者按

ここで「考工記・畫繢」を引き「雜五色」について詳細に説くことは、混ざっているが、混沌としたものではく、それぞれが際立ち主張しながら調和がとれていること、それこそが美しい（王の衣服に相応しい）ということであるから、一見矛盾しているようでありながら、整っているといことを正に主張するものである。「緐（おお）いなる勞わしさの極みであるとはいっても、しかし紛亂（まぎれ）ることはない。これも同じく亦た靜」とは、静は死んだように動かないのではなく、生き生きと動きがあるが、全体としてどっしりととどまるように静かである、というのである。相反する意味を同時に保ちながら、破綻することがない、という理解が可能であろう。この点に、１歟の本義の意味世界が発展伸長するに同じ考え方があると思われる。そして、このような意味は、モジの本義より引伸して、さらにそして假借したものであると説く。つまり、造りだされた一字が持つ本来の一義ではない。ある義をもつ一字が、本義を引き伸ばし、更に音が通じる假借によって得た用法としての義であることをいう。このために「上林賦」(注)と『周禮』「考工記」の2つの根拠を示して説いた。容易には造字によって表わせない意（ココロ）で、格別であることをいうようにも思われまいか。

もとより本稿は、中国における哲学・思想について論じるものではない。段氏の論説の根本には当然中国の歴史的及び段階的に積み重ねられた学術的な思想に対する深長な理解があったはずだが、これについては言及しない。ただ、説文の字義を説く場合に、段氏がその根拠とした考え方、それが歴代の思想の理解の当然の反映でそれに立脚していても、それを如何に自ら消化し活用したか、自説を展開するに当り採った（或いは採らなかった）その応用の仕方を追うのみである。あくまで段注は段氏の説によって一貫しているという前提に立ち、段氏の説文一書の理解を見るものである。そしてその思想の用い方のなかには、段氏自身の考えがあり、全ての学術的な知識を基に自らの生き方とさえするような考えをみることさえできる、つまり個性があると考えるのである。

以上から、青系（安系）は與系（疾）とは「安」であり、「中適」に繋がる。しかし、全く同じとはいえぬようでもあるので、以下に分けられるならば、その根拠について考えよう。

３．段氏の論述の根拠としての音韻説

意味の関連に関するポイントとなる安聲と與聲と静聲との関係を、段氏の音韻説よりみてみる。

３－１．與聲（段氏5部）と安聲（段氏14部）

段説では、與聲系は、「安」義に至る以前に、聚／趣（共に取聲）から屢・數・亟→迫速・速密と意味上は逆行するように見えるものも含め、発展的に「適中」へと向かう。

(3上39a)與には「余呂切。五部」以外に「安」と関連する意味については段氏はいわない[28]。よって、「安」は與聲系としてみた場合に関連付けられる意味の類であるようで、逆からは直ちにいえないということであろう。また（７下9a）安では與系に繋がる「此は寍と同じ意。烏寒切。十四部」と言及されている。[24]　しかし、そもそも段氏5部と14部では、「音が同じ（或いは近似）」という関係にはならない。

さらに音韻学的にみれば、段氏古音説の基本である『廣韻』ででは、與聲は反切下字が「呂」で、上聲08「語」で與（善也。待也。説文曰黨與也。余呂切、又余・譽二音）・歟（歎也又音余）・懊（説文曰趣步懊懊也）を収める。

また、又音「余」は上平9「魚」・下平9「麻」、同じく又音「誉」は上平9「魚」（ヨ・以諸切）である。ただ去聲09「御」も又音であるが、段氏は去声は古には無かったと主張するので上平聲である。よって、上平「魚」韻には、歟（説文云安气也又語末之辞亦作與）・與（上同本又餘佇切）・懊（恭敬）・鸒（馬行皃）・趣（？？安行皃）などを収め、上聲「語」

と相補関係にみえる。

３－２．安聲（14部）と静聲（11部）

「安」から「静」に関連するときは、亭（→丁聲11部）が「安定」[29]に、更に竫（11部）で「適中」にと関係が発展する。

段氏古音説では11部と14部もまた「音が近い（或いは近似）」とはいい難いが共に陽類ではある。意味がつよく通じるには他の条件が、さらに期待される気がする。念のためにいえば、5部と11部も近いとみなせる所謂合韻の関係にはならない。

３－３．安と静と與

3-1.3-2から、近い関係のモジ相互に音が近く義が通じ合うことがあっても、全体として「音が近いから意味が同じ」と直ちに三系統が結びつくようには考え難い。近い、或いは同じ音の同じ義の類であるコトバを積み重ね、一つのコトバに収束可能な世界に入ることができたといえよう。寧ろ意味が「同じ（類似）」だから、音が同じでなくとも（遠くても）、コトバの世界が一つにまとまり易い、ということではないだろうか？　『爾雅』釋詁の「初、哉、・・・、始也」が思われる。

先ずコトバが派生し発展する。すると「同じ意」のコトバの固まり（轉注の関係）ができる。しかし、その固まりは、その義だけで止まらず、寧ろ逆行すると思えるほど離れた義をもつ世界に至り、そこで止まる。ゆえに、逆からは言えず、常にこの方向からであるが（あるから）、「中適」する世界を持つ類ができる、或いは存在する、とはいえまいか。つまるところ、やはり本稿の目的としない中國的な発想に帰って考えるべきかもしれないが、そう思えるのである。

４．おわりに

これまで例に挙げたモジの段注ででも言うように、「同じ意」のコトバの固まりは轉注の関係にある。段氏は敍の六書「六曰轉注」に注するに、四部分類で經部・小学類に唯一挙げられている『爾雅』釋詁第一をばもって説く。[30]

「初、哉、首、基、肇、祖、元、胎、俶、落、權、輿、始也」から始まり、初以下の11字が全て最後の字に代表される「ハジメ」と釈かれることをいう。全12字の基本的な「ハジメ」の意は、具体的には本来個別に異なる「ハジメ」だが、最大公約数として共通の字義「ハジメ」をもつ、という意味である。逆は言い難く、古音説からも通じるともいえない。だが、その個別の意を表すための文字の造字法（モジの構造）は異なるものの、「ハジメ」

を表わすコトバとして用いられるという用法は同じで、互いに使用しあえるということである。ゆえに異字同義で互訓可能あることをいい、この轉注説は長く不明であったが師である戴震によって論破されたもので、ゆえにわが師説に従ったと力説する。

この経書とされる唯一の字書である『爾雅』の劈頭にある例をばもって、段玉裁は敍において、これこそが所謂六書説の轉注であると説いた。段注一書において、この轉注説も随所に実践的に活用し、説文の面目を回復するなど一貫した研究を生涯続け畢生の大著『説文解字注』を成した。

説文の敍で轉注の例とされる「考老是也」から考字と老字とが「同義異字」とは分かり難いが、しかし同じ部（老部）であることは理解でき、これを「同部の轉注」とみなせる。この意味で分かり易い轉注の例であると述べる。さらに、轉注は異部であっても同義になると説く。漢字の三属性（形・音・義）のうち、義に焦点を絞った説とするのに基く。音が同じ（類似）であることが轉注の絶対の条件ではない。

一方假借は「当て字」で同字異義であるが、假借の関係にあるモジがあるには音が同じ（類似）であることが欠かせない。音に焦点を絞った説に基くのである。

しかし、実際には、しばしば轉注・假借に実は音的且つ意味的に関係があることが条件で可能となったものが少なくない。段注の説では、音と義の双方が関係して轉注と假借となると解くことが少なくない所以である。

しかし、本小稿でとり上げた例は、個別に或いは段階的に音・義の通用がありながら、それで全体を網羅し一貫できる条件があるとは言えないのではないか。音や義の通用と何かがあり、同じ「適中之貌」へと至ったと考えるのである。

助語・語詞のモジが多いことにも気づく。これらは假借によってつくられる出来上がったモジの用法である。発展する場合に、実字ではなく助詞に転用される傾向が多く見えるのである。よって、意味は轉注の関係で結びつき、発展用法は假借で結びついたかと考えるのである。

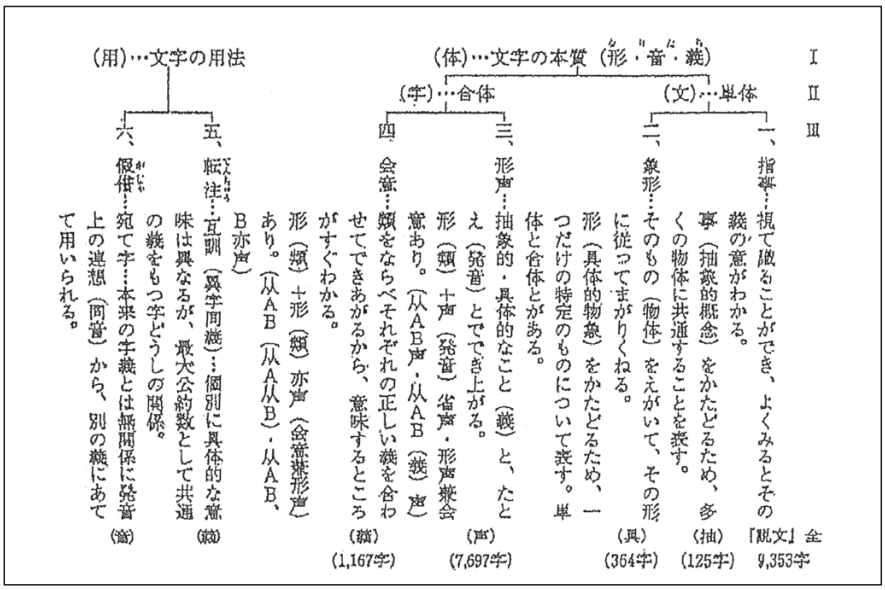
畢竟、この根底は果たして何であろうかと思う。静で「上林賦」と『周禮』「考工記」を証として引き段氏が特別に力を込めて説いた後、「人心が度（ほど）を来らかにして宜を得、一言一事に必ず理義の必然を求めるならば、そのときは則り緐（おお）いなる勞わしさの極みであるとはいっても、しかし紛亂（まぎれ）ることはない。これも同じく亦た静という。」といい、「中適」に結びつくように思える注となったのはなぜであろうか？

段注は、段氏の畢生の大著、生涯をかけた研究及び自説を随所に盛り込み上梓された。このような段氏に字書の濫觴である許慎の『説文解字』に繰り返し「静」を自らの説として注をするに至らせた真意こそが、心にかかる。単に「人とはそういうものである（べき）」

という中国哲学・思想に基づく注ではないようにも思う。その屈曲・転変の苦悩、ややもすれば苦し気でもあり矛盾かと思えることもまた、後生に教える段氏独得のことがあるのではないか。意を表すモジ（ことば）の解説に託したことがあるように思えるがしかし、筆者の力が及ばぬところであり、また本小稿のめざすところでもない。字書である段注は、その一字のみの理解ではないモジの世界を教えると改めて知るのである。[31]

注

（1）六書の図（段注により筆者作成）



（2）歟（歟）　㊀安气也。㊁从欠。與聲。

㊀如趨爲安行。鷖爲馬行疾而徐。音同義相近也。今用爲語末之辭。亦取安舒之意。通作與。論語。與與如也。

㊁以諸切。五部

筆者補注

・宋本『廣韻』九魚には、趨は「？？安行皃」であるが、鷖は「馬行皃」とある。なお、漢字データベースには「趨」には？？が付されている（今ママとする）。

・『漢書』敍傳第七十下の列伝第四十七（劉鄭・毋將・孫何傳）にみえる（但、師古注に「本傳毋將・隆在孫寶下、今此敍云毋將・孫何、是敍誤也」とある）。「長倩懊懊、覿霍不舉」下の師古注に「蘇林曰、懊懊、行步安舒也（蘇林は「懊懊は行步（あゆみ）が安舒である」といい、師古は「懊は弋於反（オク）と発音する」という）」とある。

（3）（2上34a）趣（）　㊀安行也。㊁从走。與聲。

㊀廣韵九魚。趣趣、「安行皃」。按欠部歟、「安气也」。心部愬、「趣步愬愬也」。馬部驙、「馬行徐而疾也」。『論語』曰「與與如也」。『漢書』「長倩愧愧」。

㊁余呂切。五部。

㊀安らかに行く。㊁走に从い與の聲。

㊀『廣韵』九魚に趣趣は「安行皃」。按えるに、欠部で歟は「安气也」、心部愬は「趣步愬愬也」、馬部驙は「馬行徐而疾也」である。『論語』（鄉黨篇）に「與與如也」といい、『漢書』（列伝第四十七）に「長倩愧愧」という。

㊁余呂切（ヨと発音）。五部。

（4）（10上12a）驙（ ）　㊀驙驙、㊁馬行徐而疾也。从馬。與聲。㊂詩曰。四牡驙驙。

㊀二字今補。

㊁此篆各本作鷺。解云學省聲。於角切。今正。玉篇。驙弋魚弋庶二切。馬行徐而疾。次騤下駸上。正與說文同。然則古本與玉篇同可知矣。廣韵平聲九魚。驙以諸切。馬行皃。去聲九御。驙羊洳切。馬疾行皃。集韵九魚驙下曰。說文馬行徐而疾。引詩四牡驙驙。類篇。驙羊諸羊茹二切。說文馬行徐而疾。引詩四牡驙驙。是可證宋初大徐本不誤。玉篇、廣韵皆有鷺字。訓馬腹下鳴。不言出說文。集韵、類篇皆於鷺下云乙角切。引說文馬行徐而疾也。一曰馬腹下聲。是當丁度、司馬光編書時。說文已或譌舛。乃誤以爲一字兩義。今本說文篆用鷺、解驙用驙。正與鼎部鼏篆驙解、衣部袗篆袀解同誤。葢本有鷺篆解馬腹下聲、當與騫篆爲伍耳。論語注曰。與與、威儀中適之皃。心部曰。愬、趣步愬愬也。蘇林漢書注曰。愧愧、行步安舒也。是可以證驙驙之解矣。五部。

㊂依集韵、類篇、王伯厚詩攷所引說文補。今詩無此句。小雅車攻、大雅韓奕皆云四牡奕奕。古音奕之平聲讀弋魚切。葢卽其異文也。

㊀驙驙、㊁馬が行くにゆっくりであってはやい。馬に从い與がその発音（ヨ）。㊂『詩経』に「四牡驙驙」という。

㊀二字は今補う（大徐本にはない）。

㊁此の篆文は（大徐・小徐）各本は鷺に作り説解で「學省聲。於角切（學の省略形がその発音。於角切（アクと発音する））というが、今正す。

『玉篇』は驙は弋魚（ユ）・弋庶（ヨ）の二つの反切で「馬行徐而疾」で、騤字の下、駸字の上に次いでるから、正に說文と（配列が）同じだ。然うであれば則り古本は『玉篇』と同じと知ることがで

きることになるのだ。

『廣韵』は平聲九魚で鷺は「以諸切。馬行皃（馬がゆくさま）」、去聲九御で鷺は「羊洳切。馬疾行皃（馬がはやくゆくさま）」だ。

『集韵』は九魚で鷺の下で「說文馬行徐而疾。引詩四牡鷺鷺（說文は馬が行くにゆっくりではやいとあり、『詩』の「四頭の牡（おすうま）は鷺鷺である」を引く」という。

『類篇』は鷺は羊諸・羊茹の二つの反切で「說文馬行徐而疾。引詩四牡鷺鷺」とある。是れらは宋初に大徐本（編者は徐鉉916-991ら）は誤っていないことを證拠だてることができる。

（ところで）『玉篇』・『廣韵』は皆に鷺字があり、「馬腹下鳴（馬の腹のしたがなく）と訓み、說文より出ると言わない（說文を出典としない）。『集韵』・『類篇』は皆（とも）に鷺字下に於いて乙角切（アク）といい、說文「馬行徐而疾也。一曰馬腹下聲」を引く。是れは丁度（990-1053、集韻・礼部韻略編纂）・司馬光（1019－1086、類篇編纂）が編書の時に當って說文は已に或るいは譌舛っており、乃り誤って以れで一字兩義と爲たということだ。（それで）今本說文は篆文（見出し親字）には鷺を用い、鷺（の義）を解くのには鷺（の義）を用いているのだ。正に鼎部で鼏篆に鼏字の說解、衣部で袗篆に袗字の說解であるのと同じ誤まりをした。

蓋ん本来は鷺篆で「馬腹下聲」と解くのがあり、當に騫篆と伍（くみ）と爲（し）ただけだ。

『論語』（鄉黨）の注に「與與、威儀中適之皃」といい、心部に懇は「趣步懇懇也」といい、蘇林は『漢書』の注で「愬愬、行步安舒也」という。是れらは（それで）もって鷺鷺の說解を證拠だてることができることになるのだ。五部。

㊂『集韵』、『類篇』、王伯厚の『詩攷』が引く所の說文に依り補う。今『詩經』には此の句はない。「小雅」車攻、「大雅」韓奕には皆に「四牡奕奕」という。古音は奕之平聲で弋魚切（ヨ）と讀む。蓋ん卽り其の異文であろう。

筆者補注

鷺は『說文解字』（大徐本）では「馬行徐而疾也。从馬、學省聲。於角切（アク）」だが、鷺に当るとする𩣡は、段注『說文解字注』（10上14b）では「馬腹下聲也。从馬。學省聲。於角切。三部。按許書不必有此字。姑補於此。聲廣韵作鳴（按えるに許慎の書（說文）には必ずしもこの字がある必要はないが、姑くここに補う。「聲」は『廣韻』では「鳴」に作る）とある。

說解、即ち字義が該条の注と合わないのだ。段氏が「馬腹下聲也」と說解をする字は「學省聲」であり、「與」とは関係しない。しかし、段氏古音說では3部（陽、入聲）と5部（陰）とは合音となり、通用する。論語の「與與如也」に結びつけた理由であろう。

「徐而疾」（疾而徐ではなくても）であれば、極端な両端ではなく中点突破が可能となり「安舒」として與（ヨ）と係わることができるからだと考えられる（後述参照）。

なお、説文収載字中より用いたこの鷽は貴重であるが、実は鷽（10上14b）の段注からやや問題があるようだ。このような「収載字」を、説解を修正したり、取捨選択的に、どう採用するか（否か）は大徐本との異同からも常に重要で、慎重を期したと思われる。似た例で自説を展開するために段氏が補って収めた例もあり、その場合は段注でのみ収録文字数が増えたことを、部首末の「文〇字」下で注する。

（5）歟・趣・鷽の三字は全て形声字で與聲、段氏五部。音が同じであるから義が相（たが）いに近い、といえる。

（6）『論語』（鄉黨篇）の「君在踧踖如也與與如也」。

孔子於鄉黨　恂恂如也似不能言者　其在宗廟朝廷便便言唯謹爾　朝與下大夫言侃侃如也　與上大夫言誾誾如也　君在踧踖如也與與如也

この與與につき、「威儀中適之貌」と馬融注がある。

（7）「㬎（詞を段氏が正す）」は所謂助詞の類であるが、段氏は説文が説解で用いる場合にそれを祖述するが、今日一般的な助詞など、意外に段氏自身で注ででは多くは説かない傾向が見えるようだ。「辞」という表現はさらに多くはない。大橋「ココロをコトバに―段氏の「㬎」を中心に―」（『國學院大学紀要』2016）参照

（8）10上13a驟（ ）　㊀馬疾步也。㊁从馬、聚聲。

㊀步下曰。行也。走下曰。趨也。行下曰。人之步趨也。然則行兼步與趨言之。此馬行、馬步、馬走之別也。小雅曰。載驟駸駸。按今字驟爲暴疾之詞。古則爲屢然之詞。凡左傳、國語言驟者皆與屢同義。如宣子驟諫、公子商人驟施於國是也。左傳言驟。詩書言屢。論語言屢、亦言亟。其意一也。亟之本義敏疾也。讀去吏切、爲數數然。數數然卽是敏疾。驟驟之用同此矣。數之本義計也。讀所角切、爲數數然。乃又引伸爲凡迫促之意。好學者必心知其意。於此可見也。馳驟字曲禮叚騶爲之。

㊁鉏又切。古音在四部。徐仙民毛詩音反爲在遘。古音也。

（9）（2上41a）步（ ）　㊀行也。㊁从止 相背。㊂凡步之屬皆从步

㊀行部曰。人之步趨也。步徐、趨疾。釋名曰。徐行曰步。

㊁止 相竝者、上登之象。止 相隨者、行步之象。相背猶相隨也。薄故切。五部。

㊂凡步之屬皆从步。

（10）（2上31a）走（ ）　㊀趨也。㊁从夭止。夭止者，屈也。㊂凡走之屬皆从走。

㊀釋名曰。徐行曰步。疾行曰趨。疾趨曰走。此析言之。許渾言不別也。今俗謂走徐、趨疾者、非。

㈡从夭止。夭者、屈也。依韵會訂。夭部曰。夭、屈也。止部曰。止爲足。从夭止者、安步則足胻較直。趨則屈多。子苟切。四部。大雅假本奏爲奔走。

㈢凡走之屬皆从走。

(11)（2下18a）行（ ）　㈠人之步趨也。㈡从彳亍。

㈠步、行也。趨、走也。二者一徐一疾。皆謂之行。統言之也。爾雅。室中謂之時。堂上謂之行。堂下謂之步。門外謂之趨。中庭謂之走。大路謂之奔。析言之也。引伸爲巡行、行列、行事、德行。

㈡彳、小步也。亍、步止也。戶庚切。古音在十部。

㈢凡行之屬皆从行。

(12)『詩経』小雅（四牡）　牡馬4頭立てで戦車を引く様子をうたう。

翩翩者鵻、載飛載止、集于苞杞。王事靡盬、不遑將母。駕彼四駱、載驟駸駸。

豈不懷歸、是用作歌、將母來諗。

(13)・宣公2年：猶不改、宣子驟諫、　公患之使鉏麑賊之。晨往寢門闢矣。

・文公14年：子叔姬妃齊昭公、生舍。叔姬無寵、舍無威。公子商人驟施於國、驟、數也。商人、桓公子。

注が「妃、音配。驟、仕救反。施、式豉反」とある。

(14)・『左傳』は上注(13)

・『詩』小雅・正月：無棄爾輔、員于爾輻。屢顧爾僕、不輸爾載。終踰絶險、曾是不意

・『書』虞書・益稷：「念哉！率作興事、慎乃憲、欽哉！屢省乃成、欽哉！」

・『論語』公冶長：或曰「雍也仁而不佞。」

子曰：「焉用佞？　禦人以口給、屢憎於人。不知其仁、焉用佞？」

(15) 13下15a亟（ ）　㈠敏疾也。㈡从人口又二。二、天地也。

㈠支部曰。敏者、疾也。疾者、本無其字、依聲託事之字也。後人以捷當之。今人亟分入聲去聲。入之訓急也。去之訓數也。古無是分別。數亦急也。非有二義。詩。亟其乘屋。箋云。亟、急也。詩多叚棘爲亟。如棘人欒欒。傳曰。棘、急也。我是用棘。非棘其欲。皆同。禮記作匪革其猶。革亦亟之叚借字也。釋言曰。悈、急也。亦作愬。皆亟字之異者耳。

㈡徐鍇曰。乘天之時。因地之利。口謀之。手執之。時不可失。疾也。玉裁謂天地之道、恆久而不已。手病口病。夙夜匪懈。君子自强不息。人道之所以與天地參也。故从人、从二。紀力切。又去吏切。一部。

㊀敏疾い　㊁从人口又二。二は、天地である。

㊀支部で、敏とは「疾也」という。疾とは、本来は其字（ハヤイを表わすモジA）が無いので、依聲託事（既にある本来は別義であるモジBに、発音がそのモジAと同じ、或いは近似であることに依って仮託しそのモジAの意味で使う、つまり假借）した字である。後人は捷をば以ってこれに當てる。今人は亟は入聲と去聲を分け、入の訓は「急也（いそぐ）」で、去の訓は「數也（あわただしい）」だが、古くは是れは無く、數も亦た同様に「急也」で、二つの義が」あるということではない（古くには去声は無かった）。

『詩經』（國風・豳風・七月）の「亟其乘屋（屋根をこのあいだに急いで葺き直せ）」で、（鄭玄は）箋で「亟、急也（亟は急い）」という。『詩』には棘を叚りて亟と爲ることが多い。（國風・檜風・素冠）「棘人欒欒（父母の喪に居て悲しみにせまられる私は誠に欒ほそる）」で（毛享は）傳で「棘、急也。我是用棘。非棘其欲（棘は急（せまる、共に入声）である。我は是に棘を用いるが、其の欲を棘ぐということではない）」の如うなものは皆て同じだ。

『禮記』（『詩經・大雅・文王有聲』の「匪棘其欲（わがはかりごとをイソグのではない）」を「禮器」が引く）では「匪革其猶」に作るが、革は亦た同様に亟の叚借字である。

（『爾雅』）「釋言」に「棘（紀力切）、（褊、）急也」とあり、亦た極に作るが、皆て亟字の異なるものであるだけである。

㊁徐鍇（『説文解字繫伝』）は「乘天之時。因地之利。口謀之。手執之。時不可失。疾也（天の時に乗じ、地の利に因り、口が謀り、手がしっかりと執れば、時宜は逸することができず、疾いのである）」という。玉裁は、天地の道は恆久であり已まない。手が病み口が病んでも、夙夜懈らず、君子は自強して息まない。人の道は天地とともに參る所以であることを、謂ういみであるとする。故に人に从い、二（天地）に从う。紀力切（キと発音）。さらに又た去吏切（キ）。一部。

以上より、亟＝棘＝革（『爾雅』の注に「棘亟棘革字雖異音義同」とあり）であるが、「敏疾」であり「其意一也」といえる。

(16)『禮記』「曲禮」では「左右攘辟、車驅而騶。至於大門、君撫僕之手而顧、命車右就車。門閭溝渠必步。」で、段氏は略記した。この「玉裁…」も、本稿においては関連して気になる注である。

(17)『顔氏家訓　音辭篇』にひく徐仙民の『毛詩音』

(18) 10下34a懇（ ）　㊀趣步懇懇也。㊁从心與聲。

㊀趣、疾走也。趣步懇懇、謂疾而舒也。馬部？下曰。馬行徐而疾。義正相類。漢書。長倩懊懊。蘇林

曰。懊懊、行歩安舒也。論語。與與如也。馬注曰。與與、威儀中適之皃。與與卽愬愬之叚借。欠部曰。歟、安气也。

㊁余呂切。五部。廣韵又平聲。

(19)『漢書』(卷一百下·敘傳第七十下・述蕭望之傳第四十八):「長倩懊懊、覿霍不舉」

注では、蘇林注は「懊懊、行歩安舒也。」、師古は「不肯露索而見霍光、故不得大官也。懊音弋於反。」という。

(20) 7下9a安（ ） ㊀竫也。㊁从女在宀中。

㊀竫各本作靜。今正。立部曰。竫者、亭安也。與此爲轉注。青部靜者、審也。非其義。方言曰。安、靜也。以許書律之。叚靜爲竫耳。安亦用爲語詞。

㊁此與寍同意。烏寒切。十四部。

(21) 10下20a竫（ ） ㊀亭安也。㊁从立。爭聲。

㊀亭者民所安定也。故安定曰亭安。其字俗作停、作渟。亭與竫⊠韵。凡安靜字宜作竫、靜其叚借字也。靜者、審也。

㊁疾郢切。十一部。

㊀亭安（安定）（やすらか）である。㊁立を構成成分としてもち、爭（ソウ）がその聲（発音）。

㊀亭とは民が安定する所である。故に安定（やすらかにじょう）することは亭安という。其の字体は俗に停に作ったり、渟に作ったりする。亭（テイ）と竫（セイ）は疊韵だ。凡そ安靜（といういみの）字は竫に作る宜（べき）で、靜は其の叚借字である。靜とは「審也」であるからである。

㊁疾郢切（セイと発音)。十一部。

(22)『方言（輶軒使者絶代語釋別國方言)』第十

宗、安、靜也。江湘九嶷之郊謂之宗。

(23)「語詞」は曷ほどにはあまり用いない用語で十分な検討はしていない。ただ、当時の同じく小学を専門とする交友のあった人々（王引之など）の用法から、助詞に相当すると思われる。すると、疑問詞（何・どこ・何故・同様に）或いは反語として用いられ、今日でも理解できる。なお、「安は亦た同時に」ということは、段氏当時にあっても、「安穏」などの意で用いることが先ずあり、それと同じように、ということであるから、説文の本義が生きており引伸の助詞に特化していない、ということである。

(24) 7下8b寍（）㊀安也。㊁从宀。心在皿上。㊂皿、㊃人之飲食器。所㠯安人也。

㊀此安寧正字。今則寧行而寍廢矣。僞古文。萬邦咸寍。音義曰。寍、安也。說文安寧字如此。寧、願詞也。語甚分明。自衛包改正文。李昉、陳鄂又改釋文。今人不可讀矣。

㊁會意。奴丁切。十一部。

㊂逗。

㊃故既从宀。而又从心在皿上。

㊀安らかである。㊁宀（屋根）を構成成分としてもつ。（もう一つの構成成分である）心が皿の上に在る。㊂皿㊃人が飲食するときの器で、人を安らかにする所㠯（手段・道具）である。

㊀此れは安寧（ヤスラカという場合の寧の）正字だ。今はといえば則り寧が行れて寍が廢れてしまった。

僞古文（『尚書』虞書・大禹謨）の「萬邦咸寍」で音義（陸德明『經典釋文』）では「寍、安也。」という（今十三經注疏本は「萬邦咸寧」）。說文では安寧の（意味の）字は此のようだ。

（一方で說文5上30bの別字）寧は、願詞（ねがうココロを表わすときのコトバ・モジ）である。（このように二つの異なる）語であることは甚しく明らかである。（しかし、唐代に尚書郎に至った）衛包が正文（用法上正しい字体のモジ）に改めてより（古文尚書を改めて今文に从った）、李昉（925-996）、陳鄂（北宋）はさらに又た釋文を改めたので、今人は讀むことができなくなってしまったのである（段氏は「宋開寶閒改竄」と寧字下で述べる）。

㊁會意。奴丁切（ネイと発音）。十一部。

㊂逗（くぎ）る。

㊃故に既に宀に从っているのに、而かもさらに又た心が皿の上に在るさまに从うのだ。

参考：5上30b　寧（ ）㊀願詣也。㊁从丂。寍聲。

㊀其意爲願則其言爲寧。是曰意內言外。寍部曰。寍、安也。今字多假寧爲寍。寧行而寍廢矣。古文尙書蓋有寍字。陸氏於大禹謨曰。寍、安也。說文安寍字如此。寧、願詞也。此陸氏依許分別二字。今本經宋開寶閒改竄。不可讀。

㊁奴丁切。十一部。

(25) 5下１ｂ静（ ）㊀寀也。㊁从青。爭聲

㊀上林賦靚𥳑。張揖注曰。謂粉白黛黑也。按靚者、靜字之假借。采色詳寀得其宜謂之靜。考工記言畫繢之事是也。分佈五色。疏密有章。則雖絢爛之極。而無淟涊不鮮。是曰靜。人心寀度得宜。一言一事必求理義之必然。則雖緐勞之極而無紛亂。亦曰靜。引伸假借之義也。安靜本字當从立部之竫。

㊁疾郢切。十一部。

(26) 張揖注とは、李善が引く郭璞の誤り。

(27)『周禮』「考工記」: 畫繢之事。雜五色。東方謂之青、南方謂之赤、西方謂之白、北方謂之黑、天謂之玄、地謂之黄。青與白相次也。赤與黑相次也。玄與黄相次也。

(28) 與（ ）㊀黨與也。㊁从舁与。

㊀黨當作攩。攩、朋群也。與當作与。与、賜予也。

㊁會意。共舉而与之也。舁与皆亦聲。余呂切。五部。

㊀仲間として与するである。㊁从舁と与とを構成成分とする（共に挙げてあたえる）。

㊀黨は当然攩に作るべきだ。攩は「朋群也（友としてむれなす）」であるからだ。與は当然与に作るべきだ。与は「賜予也（あたえる）」であるからだ。

㊁會意。共に舉げて（舁）そうして与える（与）のである。舁・与は皆に亦た同時にその発音。余呂切（ヨと発音する）。五部。

(29) 5下25b亭（ ）㊀民所安定也。㊁亭有樓　㊂从高省。丁聲。

㊀亭定疊韵。周禮。三十里有宿。鄭云。宿可止宿。若今亭有室矣。百官公卿表曰。縣道大率十里一亭。亭有長。十亭一鄉。鄉有三老。有秩嗇夫。後漢志曰。亭有長以禁盜賊。風俗通曰。亭、留也。蓋行旅宿會之所館。釋名曰。亭、停也。人所停集。按云民所安定者、謂居民於是備盜賊、行旅於是止宿也。亭定疊韵。亭之引伸爲亭止。俗乃製停渟字。依釋名則漢時已有停字。而許不收。徐氏鉉云。低債價停僦伺六字皆後人所加。是也。

㊁故从高。

㊂特丁切。十一部。

㊀民が安定する所である。㊁亭には樓が有る。㊂高の省略形を構成成分としてもち、丁（テイ）がその聲。

㊀亭と定は疊韵（同部）だ。

『周禮』（地官司徒・遣人）の「三十里有宿」で鄭（玄は注で）は「宿可止宿」というから、今の亭に室があるようなことになる。

（『漢書』）「百官公卿表（上）」に「縣道大率十里一亭。亭有長。十亭一鄉。鄉有三老、有秩、嗇夫（縣道には大率（おおむね）十里ごとに亭が一つあり、亭ごとに長がいる。十亭で一鄉、鄉ごとに教化を司る三老、群の所管で財入の扶持百石を司る有秩、一般労役に従事する嗇夫がいる）」という。『後漢書』「（百官）志」に「亭有（亭）長以禁盜賊（亭には亭がありそれで以って盜賊を禁（ふせ）ぐ）」といい、『風俗通』（應劭『風俗通義』）に「亭、留也。蓋行旅宿會之所館（亭（テイ）は留（リュウ）（とどまる・段氏3部）である。蓋ん行旅（たびびと）が宿り會する所の館」といい、『釋名』（「釋宮室」）に「亭、停也。人所停集（亭（テイ）は停（テイ）（とどまる）である。人が停り集る所）」という。

按えるに「民所安定也」とは、民が是こに居て盗賊に備え、行旅(たびびと)が是こで止宿(とまる)ことを謂う（いみする）。亭(テイ)(段氏11部)と定(テイ)(段氏12部)は疊韵。亭の引伸は亭止(とまる)と爲る。俗には乃り停・渟の字(体)を製った。『釋名』に依った場合には則り漢時に已に停字が有ったが、しかしながら許（慎）は（説文に）收めなかったのだ。徐氏鉉（宋代の大徐）が（大徐本の伺字下で）「低債價停僦伺六字皆後人所加（低・債・價・停・僦・伺の六字は皆後人が加えた所(もの)）」というのが是れである（段氏は削除して収めない）。

㈡故に高（たてもの）に从う。

㈢特丁切（テイと発音）。十一部。

停は大徐の『説文解字』には八篇人部に「停　止也。从人亭聲。特丁切」とあるが、段注にはない。亭を参照。渟は汀に同じとして説文にない。

(30) 十三經『爾雅』邢昺疏 「初・哉」より「始也」に至るまで

釋して曰うに、皆(すべ)て初始(はじめ)の異名である。初とは、説文に「從衣從刀、裁衣之始也（衣を構成成分として持ち刀を構成成分として持つ（會意）、衣を裁つハジメである」、哉(サイ)とは、古文は才(サイ)に作り説文では「才草木之初也（才は草木のハジメである）」といい聲(はつおん)の近いことをば以て借りて哉始(はじめ)というときの哉とする。首とは頭であり、首の始である（アタマは上部にあって人体におけるハジメ）。基とは説文に「牆始築也」という。肇とは説文では扉に作り「始開也」という。祖とは「宗廟之始也」である。元とは「善之長也」で、長は即(つま)り始の義(いみ)だ。胎とは「人成形之始也」。俶とは「動作之始也」、落とは「木葉隕墜之始也」、權輿とは「天地之始也。天圓而地方因名」だ。いう意味は此れらは皆て造字の本意であり、詩書が雅記し載せる所にまで及んで言えば、その場合には則(つま)り必ずしも盡くは此の理を取るのではないが、但だ事事の初始については俱さに焉に言い得る。他条での表記法のいみは皆て此れに倣う（これが凡例）。

(31)「疾而徐」について、狩野直喜氏は、「馬融は與與に威儀中適之貌と注し、皇（侃）の疏はといえば則り「與與猶徐徐也」という。義は皆て相い通じ得て而かも徐徐が尤も安舒と近い」という。（『両漢学術考』）

参考文献

江　沅　『説文解字音韻表』（『皇清經解續編』所収）／ 狩野直喜『両漢學術考』筑摩書房　1964年（のち1988年）

閻若璩『古文尚書疏証』　偽古文尚書（大禹謨）（嶽麓書社）

倉石武四郎『論語』（世界大学大系69、筑摩書房、1968）

「中国古典文学大系」（平凡社）:『書経・易経（抄）』「虞夏書三　大禹謨」（赤塚忠　1977）・『春秋左氏傳』（竹内照夫　1970）・『顔氏家訓』（宇都宮清吉　1969）

目加田誠『詩経』（講談社学術文庫　1991）／ 貝塚茂樹『論語』（中公文庫、1973）